＜前回＞ 17 世紀イギリスとキリスト教思想

（０）啓蒙的近代とその意義

１．近代とは：社会システム変動が現実性全般に及ぶプロセス
　キリスト教の普遍性あるいは合理性に対する根本的な問題提起
　社会統合の原理がキリスト教から次第に分離し、キリスト教の地位が相対的に低下する。キリスト教会→国民国家、神学→哲学→科学

２．カント「啓蒙とは何か」(『啓蒙とは何か』岩波文庫)

４．啓蒙主義の思想的特徴：ティリッヒ『キリスト教思想史 II』(別巻三、白水社)。

（１）イギリス宗教改革

１．１７世紀の社会的精神的状況：混乱の世紀１７世紀　→　近代へ
・ヘンリ８世の宗教改革以降：イギリス国教会、カトリック、ピューリタン
　1534（首長令） / 1547-53（エドワード６世）/ 1553-58（メアリー女王）
　/ 1558-1603（エリザベス１世）
・ピューリタン革命(1642-49)、王政復古(1660)、名誉革命(1688)
・封建制、新興ブルジョワジーと市場経済、伝統的な価値観・倫理観の混乱
　（どん欲で金権主義的なブルジョワジー）
・科学革命

３．イギリスの宗教改革の特徴とピューリタン
・上からの宗教改革、中道あるいは中途半端
・ピューリタン諸派：長老派、独立派、第五王国派
　独立派・分離派（長老派に対して信仰の自由を要求）
　平等派（成年男子の普通選挙権の要求）

４．ピューリタン（pure church)とりしまり法→チャームズ(25 ～ 49)：独裁制＊ロード体制→ピューリタン革命(1642 ～ 49)：議会の分裂（王党派と議会派・トルミーの反主教同盟）．独立派の権力掌握→ジェームズ１世の処刑(49)→クロムウェル(～ 58)・共和制(49 ～ 60)→チャールズ２世(1660/5 ～)と王政復古：
　クラレンドン法典(1661/自治体法、62/礼拝統一法、63/秘密集会法、64/５マイル法)、審査法(1673)
→名誉革命(1688)→ 89/宗教寛容法

（２）リンゼイ・テーゼ

６．リンゼイ（Alexander Dunlop Lindsay，1879 ～ 1952）・テーゼ：
　「ピューリタニズム→イギリス・デモクラシー」

７．ピューリタニズム（宗教的精神性・意味根拠）と民主主義（意味世界）

８．＜パトニー討論(1647/10/28-11/1)＞

・近代民主主義の母体としてのピューリタンの教会会議

10．レヴェラーズ（平等派）－レインバラ大佐
　1645 年頃に現れる。主にロンドンとその周辺の都市部で小親方、徒弟、手工業者、店舗経営者などを支持基盤に、署名・請願運動や政治トラクトの出版を行う。その主張は宗教的寛容、法制度改革、言論・出版の自由、独占批判などに及ぶが、それらを「生得権」ないし「自然権」として説く。自然法に基づく自己保存と抵抗権の主張。
『人民協約』(An Agreement of the People、1647 年 11 月 3 日)

11．ピューリタンの軍会議
　(1)同意の原理：神の前の平等　→　人権　→　普通選挙権

レヴェラーズ（水平派）―レインボロー大佐

(2)討論の原理：いかにして「神の意志」を発見するのか

意見の不一致、多様な意見の存在と、相互批判の容認（代議制・公認された反対政党の存在を承認）→民主的で自由な討論→合意→神の意志

神の意志の発見に関する寄与、相補性

(3)集いの精神(the sense of the meeting)：神によって集められた契約共同体

システムを支える精神性、責任ある個人・共に生きる個人

12．宗教改革の万人祭司・キリスト教の集会の経験　→　民主主義の基盤

ルターの万人祭司論→平等な人権→同意に基づく政治＝民主主義→普通選挙権

「神の前」において←→現実

13．自由な討論を保証するシステム→政教分離の原則、市民社会の宗教の原則

（３）宗教的寛容、寛容論から人権論へ

14．チャールズ２世(1660/5 ～)と王政復古：国王を首長とする主教制の国教会制の復活→長老派と独立派の弾圧→クラレンドン法典(1661/自治体法－自治体の役職につこうとするものに、国王への忠誠と国教会のサクラメントを受けることを強制する、62/礼拝統一法（聖職者に共通祈祷書への同意を強制)、63/秘密集会法（国教会の定めによらない宗教会議を禁止)、64/５マイル法（国王への忠誠誓約を拒否し、違法で集会で説教した聖職者を自治市から５マイル以遠に追放)、審査法(1673/非国教徒の公職追放)

→国王・議会・非国教徒のみつどもえの戦い→名誉革命(1688)→ 89/宗教寛容法（５マイル法と秘密集会法の廃止、非国教徒の教会の公認）→事実上は複数教会制→自治体法・審査法の廃止(18 28)

信教の自由は基本的人権の核心に属する。

17．宗教的寛容と政教分離

ロックの寛容論へと結実する。ロックは 1660 年の王政復古においては独立派に反対して、教会の儀式に対して政府は秩序の維持を理由に干渉しても良いと主張した。しかしクラレンドン法のよって非国教徒への迫害が制度化すると、ロックは考えを改めて「寛容」の必要を説くようになる。『寛容についての試論』『寛容についての手紙』

（４）アメリカの場合

19．北アメリカにおけるイギリスの植民地経営。

メイフラワー号・伝承：「信教の自由」の象徴的意味

20．ニューイングランドの宗教制度：「公定教会制」→

属地主義的・社会秩序の安定性という視点

行政組織（市民政府）は教会内の論争・紛争に公職の立場から干渉することはなく、聖職者（牧師）が政治的な公職に就くことはない。しかし、市民政府は人間の罪に起因する異端や犯罪から公共の秩序を守り、神との契約を履行しキリスト教を擁護する義務を負っている。つまり、政府と教会は協力して神の法に従わねばならず、市民社会（タウン）に属する人々は教会員でなくとも教会財政を維持する役割を担っていると考えられた。

ニューイングランドで尊重されたのは、信仰の自由を求めてイギリスから入植した自分たちの信仰なのであり、クェーカーなどのほかの教派や無神論者の権利ではなかった。

21．個人＝市民は公定教会以外の宗教を選択する自由を有していない。

22．公定教会制に対する信教の自由の立場からの批判。

ロジャー・ウィリアムズら。ウィリアム・ペンの実験（フィラデルフィア)。

５．　自然主義とキリスト教

０．17 世紀のイギリスの状況　→　近代社会の母体

科学革命の世紀＝近代科学誕生の世紀。政治的また経済的な混乱の世紀。

17 世紀イギリスの争点

政治：絶対王制／共和制、ピューリタン革命と王政復古、名誉革命、王党派と議会派

経済：封建的経済秩序／資本主義・市場経済

宗教：イギリス国教会／ピューリタン右派から中間派、そして左派

１．16 世紀のイギリス宗教改革の特性とその歴史的展開。

上からの宗教改革、カトリックとプロテスタントの中間（中道あるいは中途半端）

（１）科学革命と政治・キリスト教

２．マートン・テーゼ：キリスト教（とくにプロテスタント・ピューリタニズム）は近代科学の形成に積極的かつ実質的な寄与を行った。王立協会の初期のメンバーの多くはピューリタンの信仰の持ち主であった。

３．穏健な王制・国教会体制を擁護するという機能を有するいわばイデオロギーとしての科学。ニュートンとニュートン主義者は、最新の科学的知見（新科学）によって、無神論的思想傾向を含む論敵（右と左の）たちを合理的に論駁することを目指した。

（２）ニュートンとニュートン主義の自然神学

４．17 世紀までの多くの科学者にとって、自然探究は、神の創造の偉大さを讃美すること（＝宗教的業）であり、ニュートン科学は、無神論論駁という意図と結びついていた。

５．ニュートン研究の進展　→　ニュートンの知的世界の全貌

自然科学／自然哲学／自然神学／歴史神学／聖書解釈

６．「この至高の存在者は、宇宙霊魂（anima mundi）としてではなく万物の主（universorum dominus）としてあらゆる事物を統治する。そしてその支配のゆえに、主なる神（dominus deus）、パントクラトールと呼ばれるのが常である。というのも、神とは相対的な呼び名であって、それは僕（servus）に関連しているからである。そして神性とは、神を宇宙霊魂とする者が夢想するような、神の支配が神自身の身体におよぶことではなく、僕におよぶことだからである。」（『プリンキピア』総注）

７．『プリンキピア』の神学

①パントクラトールあるいは主という言葉遣い、あるいは神の統治や支配の強調

②無神論論駁のための神の存在論証

「この太陽、惑星、彗星の壮麗きわまりない体系は知性的で力ある存在の思慮と支配から発した以外には考えることができない。」（ibid., p.760）

伝統的な自然神学における「意図（デザイン）からの神の存在論証」

③自然哲学とその神学的根拠

自然哲学的前提は、さらにその根拠を知性的で力ある神の支配にもつのである。

８．二つの自然哲学：機械論的と錬金術的。錬金術者ニュートン。

機械論的自然哲学：物体、もの。受動的自然（外力なしに運動状態は変化しない）

錬金術的自然哲学：生命、物質。能動的自然

↓

・ニュートンの歴史研究とキリスト教史・聖書解釈

・主なる神の支配とその秩序（自然と歴史の全体）

９．イデオロギーとしての自然神学・自然科学。デザイン神学(Design Theology)
1）世界における見事な秩序・法則＝デザイン
2）偶然ではない
3）デザイナーとしての神の存在
10．ボイル講演：ニュートンの弟子たち（ベントリー、デラム、クラークら）の活躍。
ニュートン主義的キリスト教、広教会主義

（３）１８世紀と聖俗革命

11．西洋の「宗教と科学」関係論は、18 世紀、大きな変動に遭遇する。現代人がイメージする科学、あるいは宗教と科学との関係理解は、この変動に規定されている。
村上陽一郎の「聖俗革命」:「神―世界―人間」→「世界―人間」
12．「近代科学」の自律化：一つの自律的な活動としての近代科学の自立。→啓蒙的知、啓蒙的な科学理念（実証科学としての自然科学）の誕生。
諸科学・諸学問のモデル＝近代的知のモデル。
↓
自然主義
13．代表例としてのラプラス
「われわれは、宇宙の現在の状態はそれに先立つ状態の結果であり、それ以後の状態の原因であると考えなければならない。ある知性が、与えられた時点におけて、自然を動かしているすべての力と自然を構成しているすべての存在物の各々の状況を知っているとし、さらにこれらの与えられた情報を分析する能力をもっているとしたならば、この知性は、同一の方程式のもとに宇宙のなかの最も大きな物体の運動も、また最も軽い原子の運動をも包摂せしめるであろう。この知性にとって不確かなものは何一つないであろうし、その目には未来も過去と同様に現存することであろう。」（ラプラス、『確率の哲学的試論』、岩波文庫、10 頁）
14．注意点：科学の分野における相違あるいは時差

（４）啓蒙主義の帰結

15．宗教の私事化：宗教改革以降の教派的多元性の状況下での教派間対立→「政教分離」システムと信教の自由（宗教的寛容）
→公共の領域を私的な事柄（宗教、道徳、経済）の対立から切り離す。宗教を私的なものとして位置付けられる（私事化）。
16．理神論(Deism)：キリスト教思想の合理化
エドワード・ハーバード(Herbert, Edward 1581-1648、チャーベリーのハーバード)、ジョン・ロック(Locke, John 1632-1704、『キリスト教の合理性』)、ジョン・トーランド(Toland, John 1670-1722)、カント『単なる理性の限界内の宗教』(1793)。
17．歴史主義と自然主義：近代的知における知識あるいは思考・思惟のあり方に大きな変化→自然法的な超歴史的思惟、あるいは伝統的キリスト教の超自然主義からの離脱。
・思惟の歴史化（思惟の歴史性の自覚）
自然法的な超歴史的思惟　→　歴史主義
・超自然主義批判としての自然主義
超自然主義　→　自然主義
18．「自然主義と歴史主義とは、近代世界の二つの巨大な科学的創造であり、この意味に

おいてそれらは、古代にも中世も知られていなかったものであった。」
「自然主義」は、あらゆる質的なことや直接的経験を度外視する法則的な連関として、また、そのようなものとして現実総体を包括する連関として理解されねばならない。それは、数学的に最大限表現可能な量的関係法則の体系を一般的意識による日常経験の下に打ち立てることであり、純然たる空間の本質から由来する数学的定式によって、さまざまな感覚的経験像とそれらの相互連関とを表することで或る。かくしてそれは、人間精神がかつて到達したうちでもっとも大いなる、偶然や視覚的外観からの解放であり、最も膨大な広がりと明晰さをもつものであり、あらゆる技術の最も驚くべき土台である。」「哲学的な出発点や統一感覚から完全に解放され、純然たる実証科学としてあらゆる精神的エネルギーと注目とを吸収し尽すにいたった。」（トレルチ『歴史主義とその諸問題』上、ヨルダン社、159 頁）

cf.フッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』1936 年

＜参考文献＞

１．芦名定道　『自然神学再考――近代世界とキリスト教』晃洋書房。
２．マーガレット・ジェイコブ『ニュートン主義とイギリス革命』学術書房。
３．フランク・Ｅ．マニュエル　『ニュートンの宗教』法政大学出版局。
４．ウェストホール　『アイザック・ニュートン I、II』平凡社。
５．河辺六男編　『ニュートン』中央公論社。
６．ギンガリッチ、マクラクラン『コペルニクス』大月書店。
７．村上陽一郎　『近代科学と聖俗革命』新曜社。
８．大津真作　『啓蒙主義の辺境への旅』世界思想社。
９．ジョン・トーランド『秘義なきキリスト教』法政大学出版局。

（補論）ヒック宗教哲学の基本構想

Ａ．宗教概念
　宗教史・宗教現象→基軸時代・救済宗教：自己中心から実在中心への転換
　ポスト・モダン（本質主義以降）の概念規定→ヴィトゲンシュタイン・家族的類似性

Ｂ．宗教批判：近代以降の思想状況における宗教論
　自然主義への論駁、宗教経験の擁護→合理性概念の再検討、終末論、
　　宇宙的楽観主義、還元主義批判
　神の存在論証と悪論・神義論
　宗教言語論→宗教的実在論
Ｃ．宗教的多元性：宗教的状況の現代
　多元性と実在→ the Real
　キリスト教の再解釈→排他主義、包括主義批判

　以上の三つの問題領域は相互に結びついて宗教哲学の基礎問題を構成する。

＜宗教言語と宗教的実在論＞　Ｂについてのヒックの議論のまとめ
１．『人はいかにして神に出会うか――宗教多元主義から脳科学への応答』法蔵館
・The principle of critical trust

「首尾一貫しないこの認識論の現況は、イギリス経験論が発展していく伝統のなかでしだいに明らかにされてきた。この伝統に属する思想家たちの独創性と才能を十分に論じることができないとしても、まずはそれを簡潔に要約すべきであろう。」（102-103）

John Locke（1632-1704）（127）、George Berkeley（1685-1753）、David Hume（1711-76）

G.E.Moore（1873-1958）：ムーアは「二十世紀前半のもっとも重要な哲学者の一人であるが、この点でヒュームを支持し、私たちは証明できない多くのことを知っていると主張した。」（106）

There exists at present a living human body, which is my body.

The earth has existed also for many years before my body was born.

「実のところ、真理を直視するという意味での「知る」という言葉の理念的（つまりプラトン的）な意味において、あるいは論理的に誤りを犯しえないような心の状態にあるとき、私たちはただ現在あるままの意識内容と、そして」「分析的真理、つまりトートロジーの真理を知るだけである。」（106）

「ロックとバークレーに準拠し、そのため二十世紀のコモン・センス学派ないし日常言語学派の哲学者たちに支持されるヒュームは、私たちがつねに拠りどころとして生きている暗黙的な原理の定式化を可能にしてくれる。これは、とくに疑う理由のないかぎり、そこにあるように見えるものはそこに存在するものとして受け入れる、ということを指している」、「通常、私たちは自らの経験を信頼している。また、もし信頼しなければ、一日たりとも、いや一時間たりとも生きていくことはできないだろう。しかし、これは盲目的な信頼ではなく、いつでも修正できる批判的な信頼である。もしも急に目が覚め、それが書斎にいてパソコンで仕事をしている夢であったとわかったならば、そのときにはよく思い返してみて、夢で見た経験は思い違いであった――夢は思い違いをさせるものだという特別な意味のもので――と考えなおすだろう。」（107-108）

「私たちが生きていくうえで拠りどころとしている暗黙の原理は、批判的信頼ということになる。」（108）

「では、どうしてこの「批判的信頼」のを原理を、宗教体験も含めて、明かな認知体験一般に当てはめてはいけないのだろうか。」（109）

・Experiencing as interpreting / critical ralism

「世界についての意識的経験と意識される世界とのあいだの関係に関して、三つの主要な立場」の区別。

「一つは素朴実在論」「私たちの身に周りの世界はそのあるがままの姿であるように思えるとする、日常的な自然な想定」、「すべての実際的な目的のためにはこれで何の支障もない。というのも、進化するにつれ、私たち人間の感覚は」「絶えず調節されてきたからである。」（119）

「素朴実在論に真っ向から対立するのが「観念論」である。これは、知覚された世界は私たちの意識のなかにあるだけである――より正確には私の意識のなかにだけある――、なぜなら私が交互作用する他者は、私の知覚世界の一部であるからだ、と主張する立場である。」（120）

「三つ目の、中間に立つ立場は、批判的実在論である。その基本原理は近代哲学に最大の影響を及ぼしたイマニエル・カント」「にまでさかのぼる。カント以前にも類似の考えは多くあったが、その内容を体系的な方法で明らかにしたのはカントであった」、「つてつもなく複雑」「ところどころ多様な解釈を迎え入れている」、「しかしカントは、私たちを超え

る実在、私たちから独立して存在する実在というもの容認した。けれども、実在はそれ自体では意識されず、観察もされないと論じた。それは、ただ人間精神の生得的構造としてのみ、その実在からのインパクト（衝撃）を、現象界のかたちをとって、意識にもたらすことができる。そこで私たちは各自の認知的感官によって、また意識の諸形式と諸カテゴリーによって、私たちに現れるままのものとして世界を意識するのである。」（121）

「「批判的実在論」というのは、二十世紀のアメリカの哲学者によって生みだされた言葉であるが、これは世界が存在すると気づくことに心が創造的に寄与することを認める一方、その世界が私たちからは独立して存在するという実在論的な主張を表明する。その主張は十分に確証され、認知心理学や知識社会学において長く認められてきた。」（122）

「経験するとは解釈することであるというとき、私は「解釈する」という言葉を、聖書解釈でいうテキストの解釈」「の意味で使うのではなく、環境が私たちの感覚にもたらすインパクト（衝撃）をつねに私たちは解釈しているという意味で使う。また「意味」という言葉を」「私たちが目的にかなった行動や対応ができるように仕向ける事態の特質という意味で使う」、「ウィトゲンシュタイン」「の「何かを何かとして見る」と呼んだものによって」（122）、「私たちは「それを解釈しながら見ている」のである」、「「何かを何かとして見る」は、私たちが日常生活のなかでいつもするように、すべての感覚を一つに合わせて使うときの「何かを何かとして経験する」にまで、ただちに拡張することができる。」（123）

２．An Interpretation of Religion. Human Responses to the Transcendent, Yale University Press, 1989.

11 Religion and Reality（pp.172-189）

religious realism

Religious experience, then, is structured by religious beliefs, and religious beliefs are implicit within religious experience.

And by analogy religious realism is the view that the objects of religious belief exist independently of what we take to be our human experience of them. For each religious tradition refers to something ... that stands transcendingly above or undergirdingly beneath and giving meaning or value to our existence.（172）

Religious realism is not of course to be equated with a straightforwardly literal understanding of religious discourse.

We can therefore only experience the Real as its presence affects our distinctively human modes of consciousness, varying as these do in their apperceptive resources and habits from culture to culture and from individual to individual.（173）

↓

言語の指示機能として、宗教的実在論を論じるという構想。

３．宗教経験への信頼は批判的実在論として擁護できる（Ｂ）。

宗教経験について理論的な議論は無意味ではない。

＋

宗教史と現代の宗教的状況の事実としての宗教の複数性の問題（Ｃ）。

↓

この二つを理解可能にする宗教概念とはいかなるものか（宗教とは何か＝Ａ）。

４．こうした三つの問いを宗教哲学的に明確に論じた上で、キリスト教思想の内容の議論を展開する。

＜参考文献＞

０．現代宗教論
芦名定道『ティリッヒと現代宗教論』北樹出版。
１．宗教の神学
・古屋安雄『宗教の神学――その形成と課題』ヨルダン社、1985 年。
・ヒック、ニッター編『キリスト教の絶対性を超えて――宗教的多元主義の神学』春秋社。
・G・デコスタ『キリスト教は宗教をどう考えるか――ポスト多元主義の宗教と神学』教文館。
２．John Hick
・Philosophy of Religion, Prentice Hall, 1963（1990）.（『宗教の哲学』勁草書房。）
・An Interpretation of Religion. Human Responses to the Transcendent, Yale University Press, 1989.
・Disputed Questions in Theology and the Philosophy of Religion, Macmillan, 1993.
・The New Frontier of Religion and Science. Religious Experience, Neuroscience and the Transcendent, Palgrave Macmillan, 2006.（『人はいかにして神に出会うか　宗教多元主義から脳科学への応答』法蔵館。）
３．ジョン・ヒック『ジョン・ヒック自伝　宗教多元主義の実践と創造』トランスビュー、2006 年。
４．間瀬啓允『現代の宗教哲学』勁草書房、1993 年。
５．間瀬啓允・稲垣久和編『宗教多元主義の探究―ジョン・ヒック考―』大明堂、1995 年。
６．間瀬啓允編『宗教多元主義を学ぶ人のために』世界思想社、2008 年。